

児童虐待の事件について

2022. 12. 8 遠藤清賢

保育園の中でその施設を利用している子どもたちへ虐待によって保育士が逮捕されました。事件を起こした保育施設で働く職員からの内部告発で明らかになったようです。近年子どもの成長に関する研究がより広く、深くなり、いわゆるしつけに関して従来のような大人の圧倒的な力による抑え込むような躰には大きな問題があることが明らかになってきています。力によって子どもたちを支配し、大人の命令を聞き従うようすることは躰ではなく、虐待であると断定されています。躰とはまったく違うことが明らかになっています。私の幼い時は祖父から拳骨をもらったことが何度もありました。やはり祖父は怖いという思いがいつもあり、祖父が居るときは静かにしていました。言うことを聞かない子は叱られることが当たり前前の時代であったかもしれません。しかし、拳骨とか大声の叱責は正しい行為ではないことが次第に明らかになっています。頻繁に叱られて育った子供と、優しく育てられた子どもとではその成長に大きな差が認められるのだそうです。勉強ができる、できないということではなく、自己肯定感や人間関係制の形成に於いて大きな差が見られるのです。子どもを大人の圧倒的な力によって制圧した場合、自分が叱られる理由を理解する、しないに関わらず、強い恐怖感だけを感じます。自分が悪ことをしたということが理解できるのは4歳の後半くらいになると思います。ですから1歳、2歳児を叱責することはただ恐怖感を植え付けるだけなのです。その恐怖感が毎日のように継続された場合、脳の成長が滞り、脳に欠損が生じることが明らかにされているのです。子どもを大きな力のよって制圧することはいけないことなのです。このような行為が保育園の中に於いて日常的に行われていたのですから、子どもたちは萎縮し、自信のない、静かな子どもたちだったと思います。一見するとそのクラスは良く制御されてお話を聞ける子どもたちのように見えるのですが、それは担任の先生たちが恐ろしいからそうしているだけなのです。4月とか5月の年度当初に於いて、主に乳児のクラスでは、誰かが立ち歩き、騒然としていて、中には不安や寂しさで泣き叫んでいる子どももいるのです。先生たちが同じことを何度も繰り返し、お話ししているのですが、子どもたちは自分勝手に行動し、にぎやかなクラスが普通です。ですから乳児クラスは担任が多く配置されています。徐々に子どもたちと先生との良い関係が構築されて、信頼関係が出来てくると、年度半ばには、その先生が近くにいるだけで子どもたちは安心し、先生の思いを理解し、クラスとしてまとまった生活ができるように成長するのです。力で制圧してしまうと子供たちの成長はその時点で留まってしまうので

す。クラスは静かですが、笑顔がなく、不安げな表情の子どもたちが多くみられるのです。保育士は自分の話しを良く聞き従う子がとても良い子であると勘違いするのです。しかし、登園時保育園に行きたくないとか、具合が悪い等の不調を訴える子が多くなります。普通に保育を行ってれば、子どもたちはそこにいるだけで楽しく、喜んでいきます。何の不安もないのです。先生のところに子どもたちが自然と集まり、一緒に楽しい時を過ごしている時間が多くなるのです。

保育士は子供の成長にどのような視点でそれぞれの子どもたちの未来を思い描いているのかが問われるのです。子どもの未来に大人である自分と同じ価値観を持たせようとしてしまうのは危険なことです。私たちが子どもたちに対して様々な体験を提供し、その体験によって知り得た知恵を共感することが大きな保育士としての働きになるのです。時には自分の持っている価値観と違う知恵を持ったとしてもそれをありのまま受け入れる度量の大きさが保育士には求められます。保育の基本として幼い子どもの成長を支える為には、生きていることの喜びと、お互いに支え合う愛情です。それによって得られる子どもからの信頼なのです。生きる喜びと人を信じる精神が構築されれば、子どもたちは逞しく、また優しく、お互いに力を合わせながら生きることができるようになります。

このような虐待を保育士個人の問題、その保育園の問題としてしまうのは間違いです。お年寄りの施設やハンディーのある方たちの利用する施設に於いて、利用者が虐待される報道がかなり多くなっています。そればかりではなく、様々な苦情による事件も良く聞きます。また本当の家族の中での殺人事件も多くなっているように思います。社会自体がどこか病んでいるのだと思います。他者を心から信頼できない。他者との良い関係を持つことができない。自分の利益のためなら、他の人を平気で傷つけてもいいと思ってしまう人が多くなっているのかもしれない。世界に於いても戦争が行われているのは個々の人間の心がどこかに優しさを喪失してしまっている現実があるのだと思います。虐待をしたことを肯定するつもりはまったくありませんが、私たちは虐待した保育士たちをさらに徹底的に抹殺し、立ち直る機会を与えないような世の中であってはいけないのです。報道が執拗に細かくこの人たちのしてきたことを報道するのだろうと思います。社会の中でこのような事件の原因は自分自身の心の中にもあることをしっかりと自覚し、本当の保育の在り方、子どもたちとのかかわり方、そして、自分自身の生き方を見つめ、良い方向に向かって人生を歩まなければならないのです。子どもたちの喜ぶ姿を心から祝福し、この喜びの中にいることを心から感謝し、生きていることができる幸せを噛み締めことができるのが保育の働きです。